

平成15年度資源評価票（ダイジェスト版）

標準和名 カタクチイワシ

学名 *Engraulis japonicus*

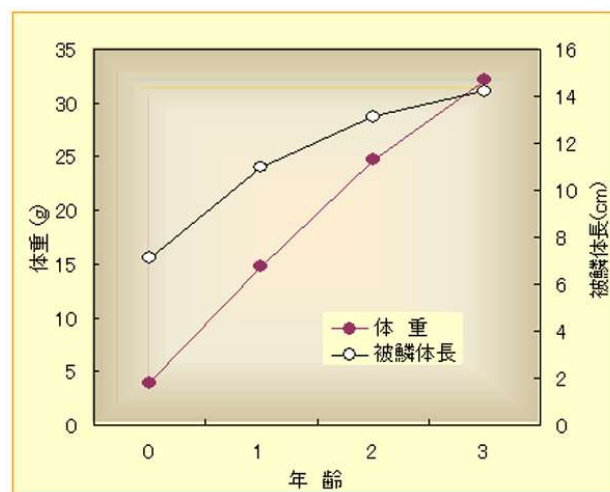
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特徴

- 寿命： 3歳
- 成熟開始年齢： 満1歳
- 産卵期・産卵場： 冬季を除くほぼ周年で早春から夏までが盛期、沿岸から沖合の広い海域
- 索餌期・索餌場： 周年、九州から北海道に至る太平洋の沿岸から沖合の黒潮域、黒潮続流域、黒潮親潮移行域、親潮域にまで拡大し、東は経度180度附近の海域まで
- 食性： 動物プランクトン等
- 捕食者： 中大型の浮魚類、鯨類



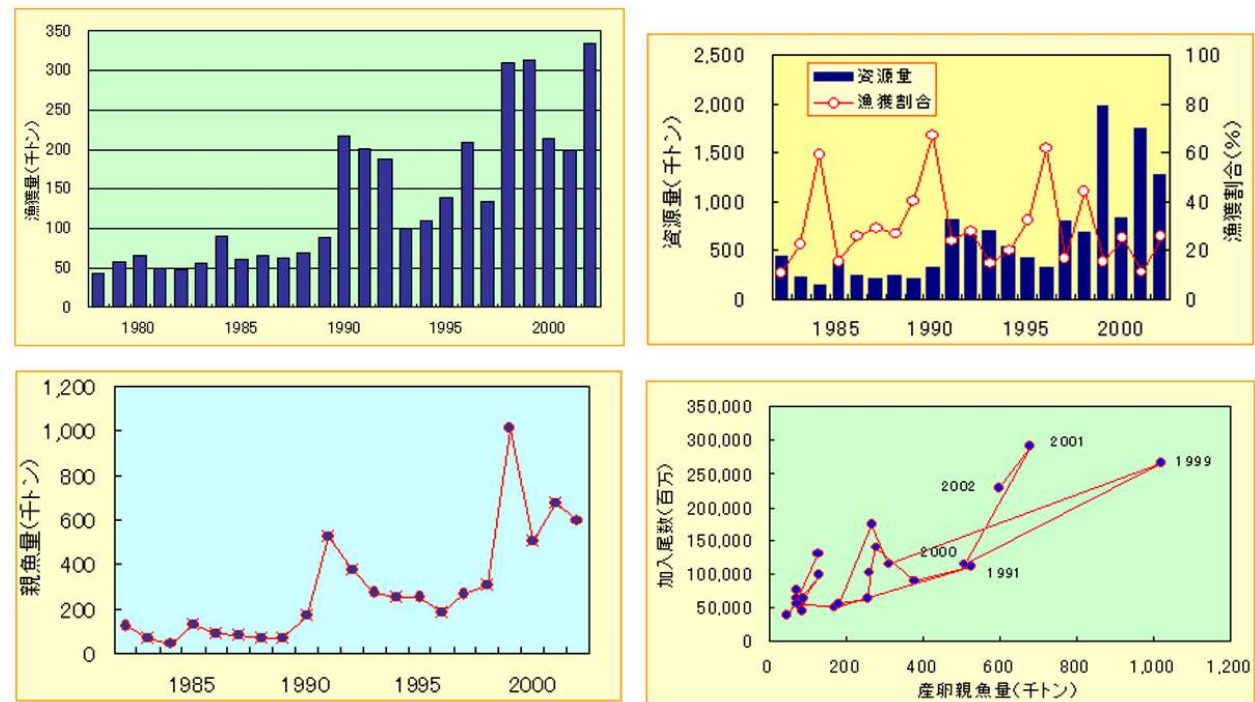
漁業の特徴

漁場の中心は常磐から房総の沿岸で、黒潮流軸から黒潮続流域、黒潮・親潮移行域に分布する魚群は漁獲していない。シラス船曳網の漁獲物の大半は本種の仔魚であるが、分布域に対して漁場が極めて狭いため、この漁業が資源に与える影響は大きくない。最近の漁獲割合は20%前後で推移している。狭い漁場内では高い漁獲圧がかかっているものの、系群全体への影響は大きくないと考えられる。

漁獲の動向

1989年まで数万トンで推移していた。1990年にそれまで少なかった太平洋北区で急増して20万トンを超え、1992年まで15万トン以上で推移した。1993年は10万トンに急減した後増加に転じ、1996年は再び20万トンに達した。1997年は13万トンに減少した。

が、1998、1999の両年は30万トンを超えた。2000年はやや減少して21万トンとなり、2001年はわずかに減少して20万トンとなった。2003年は再び30万トンを超えた。



資源評価法

産卵調査により求めた産卵量と今井ほか(1998)の水温を考慮した卵数法により、農林漁区大海区毎に親魚量を計算した。親魚量は、大海区別に水温15度以上の月のみ計算し、合計親魚量が最多となる連続3か月の平均値をその年の親魚量とした。この親魚量とコホート解析により推定した年齢組成から未成魚を含む資源量を求めた。

資源状態

1988年までは0歳魚尾数が過半数を占める年が多かったが、1989年以降は1歳魚が大半で、1990年からは2歳魚も目立っている。資源量は1990年までは50万トンを下回る水準で推移、1991年から1994年まで50万トンを上回り、1995年、1996年は50万トンをやや下回った。1997年に再び50万トンを超え、1999年は急増して200万トンとなり、2000年は半減したが、2001年、2002年は100万トンを上回る高水準である。なお、沖合の黒潮域、黒潮続流域から黒潮親潮移行域などの海域では産卵調査を行っていないので、推定資源量はやや過小評価の可能性はある。北西太平洋全域では少なくとも数百万トンの現存量があると推定される。加入尾数は、1991年以降1995年を除いて奇数年で増加し、偶数年で減少している。産卵量は1991年に急増した。1995年にかけてやや減少し、最近が高水準となっている。



管理方策

現状をある程度越えて漁獲しても問題はないと考えられる。管理指標値を漁獲係数(F値)として、現状の漁獲係数から生物学的許容漁獲量の目標値(ABCtarget)を求めた。限界値(ABClimit)は設定しない。

A B C limit				
A B C target	322千トン	Fcurrent	1.53	22%

F値は各年齢の単純平均
漁獲割合 = ABC / 資源重量
資源量は1月の値

資源評価のまとめ

- 漁場の相当沖合の広い海域に魚群が分布しており、北西太平洋全体の現存量は本報告の推定値を大きく上回る
- 資源は高水準、横ばいで、漁獲が悪影響を与えていない
- シラス漁業が資源に与える影響は小さい

資源管理方策のまとめ

- 現状をある程度越えて漁獲しても問題はない

資源評価は毎年更新されます。